

事業の名称

不登校児童生徒支援事業

〔事業責任者〕

(自治体等側)

茨城県水戸教育事務所・所長 田邊 一男

(大学側)

大学院教育学研究科・教授 正保 春彦

事業テーマ：地域の教育力向上

連携先

茨城県水戸教育事務所

プロジェクト参加者

茨城県水戸教育事務所

主任社会教育主事 佐々木英治 (担当：コーディネーター)

学校教育課主査 佐藤和彦 (担当：プログラム実施アシスタント)

茨城県教育庁生涯学習課

社会教育主事 鈴木昭博 (担当：各種団体連携サポーター、雪上体験講師)

大学院教育学研究科

教授 正保春彦 (担当：プログラム監修、グループワーク講師)

学校臨床心理専攻修士1年 豊田理央
(担当：グループワークアシスタント)

学校臨床心理専攻修士1年 松原育子
(担当：グループワークアシスタント)

教育学部

人間環境課程心理コース4年 李 鍾彬
(担当：グループワークアシスタント)

朗読家

見澤淑恵 (担当：プログラム作成アシスタント、朗読の世界講師)

サウンドプロデューサー

永井真一 (担当：プログラム作成アシスタント、朗読の世界講師)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

平成26年3月現在、茨城県水戸教育事務所管内における30日以上長期欠席児童生徒（不登校児）数は842名おり、本人とその保護者及びその支援に努めている教職員も含めて、日々悩みを抱えながら生活を送っている。特に現在、市町村が設置している適応指導教室に多くの不登校児童生徒が通所しているが、それぞれの教室での活動内容・規模は限定的な場合が少なくなく、発展性に乏しいという現状がある。そこで、大学の専門性、青少年教育施設がもつ機能、地域のボランティア等の連携により、適応指導教室在籍の児童生徒等に様々な体験活動を、またその保護者にカウンセリング等の機会を提供し、子どもと保護者の心の安定を図ることで不登校改善の一助となることを目指すものである。

②連携の方法及び具体的な活動計画

県として上記の不登校問題解決は喫緊の課題であり、大学からの支援・指導を受けながら、困惑を極める不登校児童生徒及びその保護者への支援に努める。そのため、水戸教育事務所は大学を中心とする関係機関の連携体制の確立に努め、その専門性を大いに発揮できるステージの設定並びに整備を全力で担う。また、種々の教育理論を検証する実践の「場」として、大学の研究に役立てることを期待し、これからの大学と自治体の地域連携モデルを提案したい。

(1) 募集方法：市町村教育委員会を通して参加者

を募集

- (2) 実施期間：2014年9月～2015年2月（第1回：2014年9月23日，第2回：2014年10月25日，第3回：11月22日・23日，第4回：2015年2月14日・15日）
- (3) スタッフ：カウンセラー，ファシリテーター，体験活動支援スタッフ
- (4) 参加者：不登校児童（小学生）及び保護者4家族
- (5) 予算：人件費，旅費，消耗品費（茨大戦略的
地域連携プロジェクト事業から）。
その他受益者負担（施設使用料，宿泊費，食費等）
- (6) 事務局：水戸教育事務所（事業実施連絡調整・参加者募集等）

③期待される成果

本事業は，なかなか解決の糸口が見出せないでいる不登校や引きこもり等の現代的課題に対し，これまでは本格的に取り組まれることのなかった新たなアプローチであり，有効な打開策となることが期待される事業である。

他方，大学側としては，従来不登校児等とのかわりは相談室・機関等の枠の中で行われてきたが，そのような枠を越えた活動の企画・立案に参画すると共に，実際に実践活動を行うことにより，新たなかわりの可能性を拡げることが期待される。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

(1) 第1回活動

期日：2014年9月23日（火・秋分の日）

於茨城県立児童センターこどもの城

参加者：児童4名，保護者3名，水戸教育事務所担当者2名，茨城大学教員1名，茨城大学学生・大学院生3名，計13名

活動内容：グループワーク，うどん作り，キーホルダー作り，磯遊び，しゃべり場（保護者集団カウンセリング）



グループワーク



磯遊び

(2) 第2回活動

期日：2014年10月25日（土）

於茨城県立児童センターこどもの城

参加者：児童3名，保護者2名，水戸教育事務所担当者2名，茨城大学教員1名，茨城大学学生・大学院生2名，計10名

活動内容：グループワーク，火起こしとバーベキュー，わくわく科学館探索と不思議メガネ作り，しゃべり場（保護者集団カウンセリング）



グループワーク

(3) 第3回活動

期日：2014年11月22日（土）～23日（日）

於茨城県立児童センターこどもの城

参加者：児童4名，保護者3名，水戸教育事務所担当者2名，茨城大学教員1名，茨城大学学生・大学院生3名，朗読家1名，サウンドプロデューサー1名，以上計15名，他アクアワールド大洗水族館スタッフ

活動内容：グループワーク，もちつき大会，ウォークラリー，しゃべり場（保護者集団カウンセリング），MISAWAワールド（朗読の世界），夜のアクアワールド探検，キャンドルファイヤー



朗読の世界

(4) 第4回活動

期日：2015年2月14日（土）～15日（日）

於国立那須甲子青少年自然の家

参加者：児童5名，保護者5名，水戸教育事務所担当者2名，茨城大学教員1名，朗読家1名，サウンドプロデューサー1名，以上計15名，他那須甲子青少年自然の家スタッフ



なすかしの森スキー・スノボ教室

活動内容：なすかしの森スキー・スノボ教室，スノーモービル体験，出会いのセレモニー，こども放送局

②プロジェクトの達成状況

(1) 参加者の反応

市町村教育委員会や適応指導教室の関係者に対する事業説明時における反応から，本事業の必要性やその効果については充分理解が得られたと思われる。実際に，参加者の多くは適応指導教室からの働きかけによるものであった。また参加までには至らないが，必要性を感じている家族（特に保護者）が存在することが数件確認できた。

実際に活動を実施したところ，参加児童・保護者の反応は非常に良好であった。

第1回参加者の次回への参加意欲は100%であった。また第1回では，保護者については各家庭共，母親のみの参加であったが，第3回活動時には3家族中2家族は父親が参加するに至り，第4回活動時には両親で参加する家庭もあり，保護者側における意識の変化が少なくなかったと見られる。また，当初予定では第3回（11月22・23日）で活動は終了予定であったが，終了後，参加児童及び保護者から再度開催の要望があり，第4回活動企画のきっかけとなったことは特筆すべきと思われる。

保護者からは，「この活動を通して子供の変化を感じることができている」「普段できないことを体いっぱい遊べてよい思い出ができた」「家族で体験できていい思い出になった」「今後も継続してほしい」等の感想が寄せられた。特に，第4回終了後は，「子供のスキー教室やスノーモービルなど普段できないこともありとても楽しめた」「夏のキャンプの活動もあれば参加したい」「初めてのスキー体験でとても良かった」「子供たちにとっては初めてのスキー体験だったが今までにない喜びを表現していたことが印象的であった」等の感想が寄せられた。

(2) 連携活動による成果

朗読家（見澤淑恵氏）やサウンドプロデュー

サー（永井真一氏）との連携による活動を仕組み、成果を上げることができた。朗読家の本物の朗読やサウンドプロデューサーの仕事に接し、言葉の持つ素晴らしさやプロ意識を持って働いている人の人間性に触れる体験をすることができた。さらに保護者を含む皆の前で自分が実際に朗読をし、その音声をCD-ROMの形で残すことができた。これにより、自分の声で表現することや今の自分を声で残す体験をすることができたことは、有意義なことであったと思われる。

また、アクアワールド茨城や大洗おもしろ科学館の協力により、夜の水族館探訪や不思議メガネ作りなどの魅力ある活動ができたことも、活動の幅を広げるという点で大きな意義があった。

特に、国立社会教育施設である那須甲子青少年自然の家におけるスキー・スノボ宿泊活動への参加は、参加児童家族の体験の幅を広げ、新たな親子のかかわりを創る意味で非常に大きな意義があったと言える。

(3) 大学側のかかわりによる効果・影響

大学教員がすべての活動に実際に参加し、多くのグループワークを実施し、かつ集団形式でのカウンセリング活動を実施した。特にグループワークの実施は、参加児童親子に対して普段の親子関係を越えたかかわりを提案し、実践するという点で有意義であったのみならず、同時に参加した水戸教育事務所担当者に対して、新たな実践のモデルを提示するという点で大きな意味があったと言える。また、学生・院生が参加したことは、不登校児童にとっては、普段の日常生活では得られないお兄さん・お姉さんのなかかわりが得られたという点で有意義であったと言える。

他方、学生・院生にとっては、大学・大学院の授業において行っているグループワーク諸活動が、実際の援助場面でどのように実践されるのかを実際に体験することができた。また、大学の相談室の活動は高度に構造化され、不登校児童生徒に対して親子平行面接の形で親子別個に相談活動を行っているが、今回の活動においては、さまざまな場面での親子の相互関係を具体的に観察・理

解することができ、貴重な経験となった。大学教員にとっては、学生・院生に対して、大学の枠を越えた環境での援助の体験を与えることができた点は非常に有意義であった。

また、外部講師を招いて活動を行い、それに共に参加することにより、大学での教育の枠を越えた活動に接し、またその活動を補助することにより、新たなかかわりの可能性に触れることができたことも特筆すべきであろう。

(4) 児童・保護者の変容

児童は、毎回参加を楽しみにしており、他の参加児童とも予想以上に相互にかかわりを持つことができるようになった。また、自分たちで話し合いをし、折り合いをつけてゲーム等ができるようになってきた。さらにグループワークの「ほめほめタイム」では集団の中で自分の良い点を多数指摘されるという体験をし、自尊心の高まりが感じられた。

家庭では遊びなど親と共に過ごす時間が増え、「普段はこんなに遊んでくれないよ」との言葉も聞かれた。普段より子供とかかわる時間が増えたことにより、子供とかかわり方を考える機会となったことが推測される。

母親によれば、ある小4男子は、保健室登校より教室に入れる回数が増えてきたとのこと。また、参加児童在籍校長より、事業参加をきっかけにして、今まではほとんど別室登校であった児童が教室で授業を受けたり、休み時間には友達と遊べるまでになったと報告もあった。活動終了後には子供から「来年もまたこの活動やるんでしょ。」という発言も聞かれた。

保護者とのカウンセリングや活動参加状況からは、母親だけでなく父親も活動に参加する家族が出てきた（2家族）。また様々な活動を共に体験する中で、子供の新たな面を見つけることができたことに喜びを感じるという保護者の声もあった。しゃべり場（集団カウンセリング）でゆったりした感情を味わい、「ほめほめタイム」で自分の子がみんなから褒められるという体験をしたことは有意義であったと思われる。

③今後の計画と課題

水戸教育事務所管内の各教育委員会、各小中学校を通して、かなり広範囲に渡って広報活動を行ったが、それでも参加者数は一定数内に留まった。そもそも「不登校児」という集団参加に問題を抱える児童生徒を、不特定多数との交流の場所に誘うことの困難さを改めて認識させられた。また実際の広報状況を、後日、現場において確認したところ、「届いていない」「知らない」との回答が少なくなかった。行政組織において、周知を徹底することの困難さを再確認させられたとも言える。

上記の問題には、当初の広報活動において具体的な活動内容を十分告知するには至っていなかった

たという点が挙げられるかもしれない。しかしながら、今回の活動に基づいて具体的にわかりやすい一般向け報告書を作成することができた。今後は、この報告書を活用して、具体的なイメージが湧く広報活動を組織の要所所に行うことによって、さらなる参加を促すことが期待される。

今後の課題としては、保護者相互の関係づくりが挙げられる。今回、各回の活動において参加児童は円滑な関係作りを行うことができた。しかしながら、保護者相互の十分な関係形成にまでは至らなかった。また前記の問題と関連して、不登校児童生徒が参加しない場合における保護者を対象とした企画を検討する必要があるかもしれない。不登校児童生徒を抱える保護者を支援する枠組み作りが今後の課題と言える。

ほっとステーション活動のあしあと 2014

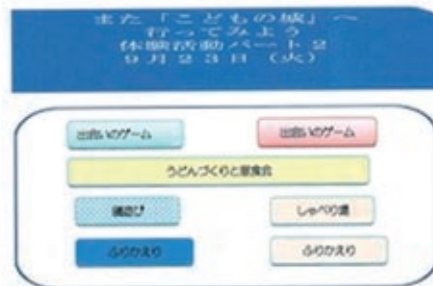
～茨城大学戦略的地域連携プロジェクト支援事業の取組～

参加者（児童生徒・保護者）が
様々な体験活動を通して、
心がほっとしたり、
わくわくしたりする時間になるよう。
そして
それぞれのこころの基地となることを願って
「ほっとステーション」活動としました。



主催 茨城大学
共催 水戸教育事務所

IV ほっとステーション活動の記録(第1回～第4回) 第1回ほっとステーション活動のまとめ



- 参加者 児童 小学校3年2名(男子)、6年1名(男子)、2年生1名(女子)
保護者 母親3名
- スタッフ 水戸教育事務所社会教育担当2名、茨城大学教授 正保孝彦
茨城大学学生・大学院生2名(男1・女1)

集合時のようす 9月30分受付

・10分前になってみだれもないので担当者はヤキモキ。



出食ったばかりの「ほっとステーション」メンバーの心の中は?

・やっと2家族が到着し輪をなで下す。その後受付時間ギリギリで1家族が到着。大洗駅からバスで来るはずのバスがな

40分歩いて来られたとのこと。
○2家族とも子どもは後ろの座席に座り、隠れるような感じであった。表情は緊張し、全員寝かった。

作成した報告書（一部）